

三重県桑名市

ハサマ遺跡発掘調査報告書

2003.3

桑名市教育委員会

例 言

- 1 本書は三重県桑名市大字森忠字正津376の1部外・大字芳ヶ崎字ハサマ895-1外に所在するハサマ遺跡（市遺跡№136）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宅地造成にかかる事前緊急調査として、原因者負担を受けて行った。
- 3 現地での調査は平成14年7月3日から10月3日にかけて、整理作業は平成15年3月31日にかけて実施した。
- 4 調査体制は以下のとおりである。

調査主体 桑名市教育委員会

調査員 齊藤理（桑名市教育委員会）

平野亜紀（桑名市教育委員会）＊調査担当

調査参加者 安達靖人、伊藤公一、岩間昭道、岡本広子、奥田崇見、川面英之、

河村美奈、小谷智子、酒井聖人、鈴木春香、宮嶋克明、吉井理恵

（以上愛知学院大学学生）、後田将志、大杉規之、柴田涼子、勝亦貴之、

長沼毅、水谷憲二、水谷吏江

なお、文化財保護法に基づく諸手続及び調整事務等については水谷芳春（桑名市教育委員会）が担当した。

- 4 試掘調査に伴う測量は岡三リビング株式会社が、基準点設置は株式会社バスコが行った。発掘調査に伴う調査掘削は高橋土建株式会社、空中写真測量は株式会社イビソクがそれぞれ行った。
- 5 本報告は第1章第1節を水谷芳春、第1章第2節、第2章、第3章第2節を平野、第3章第1節、第4章を齊藤が執筆した。全体の編集は水谷吏江、柴田、岩間の協力を得て、齊藤、平野が行った。
- 6 発掘調査及び本書の作成過程において、下記の機関、方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。（敬称略）

三重県教育委員会、石神教親（多度町教育委員会）、宇佐見隆之（滋賀大学）、

尾野善裕（京都国立博物館）、日紫喜勝重（野洲町教育委員会）、

松齒齊（愛知学院大学）、水橋公恵（斎宮歴史博物館）

- 8 本調査は、太平洋不動産株式会社の文化財に対する深いご理解のもと実施することができた。調査に対する格別のご協力、ご援助に対して厚く御礼申し上げます。
- 9 現地調査に関しては、地元の方々に格別の援助をいただいた。厚く御礼申し上げます。
- 10 本調査に関する記録及び出土遺物等の諸資料は桑名市教育委員会で保管している。

本文目次

例言	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査経過	
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 遺構と遺物	4
第1節 遺構	
第2節 遺物	
第4章 まとめ	11

表目次

表 1	遺物観察表
表 2	遺物観察表

図版目次

図版 1	調査地点位置図
図版 2	試掘トレンチ位置図・調査区土層断面図
図版 3	遺構平面図
図版 4	遺構断面図
図版 5	遺構断面図
図版 6	遺物実測図
図版 7	遺物実測図
図版 8	遺物実測図
図版 9	遺物実測図
図版10	遺物実測図
図版11	遺物実測図

カラー写真図版

カラー写真図版1 調査区全景

写真図版

写真図版1	調査区近景・試掘
写真図版2	遺構
写真図版3	遺構・調査風景・現地説明会風景
写真図版4	遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成13年9月10日付都市計画第106号にて太洋不動産株式会社から、三重県桑名市大字森忠字正津、大字芳ヶ崎字ハサマ地内における開発行為の事前協議願が桑名市都市計画課に提出された。都市計画課から合議を受けた文化課は都市計画法第32条に基づき太洋不動産株式会社と協議を開始した。文化課は開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないものの、正津遺跡（市遺跡No61）に近接することから、文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会されたい旨を説明した。

太洋不動産株式会社より、平成13年10月11日付教文第208号にて文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会を受けた文化課は、精細な現地踏査を行った。その結果、土師器・須恵器・山茶碗等の細片が表面採集されたため、遺跡の有無及び残存状況を確認するための試掘調査が必要な旨を太洋不動産株式会社に連絡した。

試掘調査は文化課文化振興係主事斉藤理を調査担当者として平成13年11月5日から12日にかけて行った。試掘調査は開発予定地に14箇所のトレンチを設定し、掘削を行った。その結果、開発予定地の西半で遺跡と考えられる遺構・遺物が確認されたため、文化財保護法第57条の6第1項に基づく遺跡発見の通知を平成13年11月20日付教文第252号にて三重県教育委員会に提出した。発見された遺跡は小字名をとってハサマ遺跡とし、市遺跡No136として台帳、地図等に登録された。

その後、遺構に影響する開発を行う場合は事前に発掘調査による記録保存が必要であることを確認し、遺跡保存にむけての協議を重ねて行ったが、工法上、現状保存が困難と考えられる部分に関しては、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

太洋不動産株式会社より、平成13年12月18日に文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を受けた文化課では、平成13年12月27日付教文第208号の4で三重県教育委員会に届出を行い、文化課文化振興係学芸員平野重紀を調査担当者として平成14年7月3日に発掘調査に着手した。文化庁に対する埋蔵文化財発掘調査着手の報告は、文化財保護法第58条の2第1項に基づき、平成14年8月14日付教文第167号にて行った。

第2節 調査経過

調査は平成14年7月3日から開始し、上層から順次掘削を行った。表土層については試掘調査で近年の耕作土であり、遺物の出土もほとんどみられないことが確認されているためバックホーでの掘削とし、排土はクローラーにて調査区の東に搬出した。なお、この作業は工事を施行している高橋土建株式会社の協力を得た。

表土直下の標高18.400m前後で試掘調査の際に遺物包含層と認識した暗褐色粘質土層が確認できたため、人力での掘削に切り替え、遺物の採集を行った。遺物は山茶碗等、中世のものがほとんどであったが、古代の須恵器や灰釉陶器等の出土もみられた。遺物包含層の堆積はごく僅かで0.3m程度であった。

遺物包含層の掘削後、標高18.100m前後で遺構と考えられる掘り込み等が検出されたため、精査を行った。その結果、土坑、溝等の遺構が確認されたため遺構面と認識し、写真撮影、測量等を行った。土坑、溝等は埋土の堆積状況を確認するため半裁、ないしは畦を残して掘削し、断面図を作成した。

地形測量は開発工事の進捗状況から現場作業の時間短縮が望まれていたため、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を採用し、株式会社イビソクが実施した。また、開発工事の作業工程上、調査区の南端及び西端に予定されている道路を先行して取り付けが必要があったため、道路部分の調査を優先して行い、測量を行っている。よって測量用の写真撮影を2回行っており、道路部分の撮影を8月6日、その他の部分は9月9日に実施した。

調査は湧水が激しく遺構面の観察が困難であったが、建物跡4棟、井戸2基、溝7条、柱列4条等を検出した。湧水対策のため、一部遺構面に排水用の溝を掘削しての調査となったが、上記の明確な遺構が確認され、遺物も墨書土器や瓦、暗文土師器等が出土する等の成果が見られた。

9月6日には新聞発表、9月14日には現地説明会を行い、現地での調査を終了した。

整理作業は引き続き実施し、図面整理、出土遺物の洗浄、接合、実測、写真撮影等の作業を随時行い、平成15年3月31日に報告書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

ハサマ遺跡は三重県桑名市大字森忠字正津、大字芳ヶ崎字ハサマに所在する。

本遺跡のある桑名市は三重県の北東部に位置し、北は桑名郡多度町、西は員弁郡員弁町、南は四日市市・三重郡朝日町に接する。市の東部から南部にかけては揖斐川・長良川の両河川が流れ、北部には養老山脈より続く丘陵部が伸びている。また市の南部には西から南東へと流れる員弁川があり、その両岸には標高40～70m弱の丘陵地が形成されている。市域には河川の影響等により、丘陵部からごく緩やかな傾斜を持ちつつ広がりを見せる沖積平野が発達している。こうした自然環境の中、本遺跡は員弁川北岸、嘉例川と弁天川に囲まれた緩やかな傾斜を持つ沖積平野上に立地している。

本遺跡の周辺には奈良時代以降の遺跡が多数確認されており、古代の寺院跡・中世城館跡・集落跡などが点在している。本遺跡の東方約300mには古代の寺院跡である七和庵寺（市遺跡No44）があり、土師器・須恵器・瓦等が表面採集されている。さらに東の丘陵先端部には中世城館跡である星川城跡（市遺跡No62）が所在する。その西には延喜式内社である星川神社、さらに西には桑名市指定文化財木造聖観音像の安置される安渡寺がある。また嘉例川を北に遡ると嘉例川城跡（市遺跡No21）が丘陵上に立地する。本遺跡の東には、平成5～6年度にかけて行われた市内遺跡詳細分布調査によって発見された正津遺跡（市遺跡No61）が近接する。また、北西300mには奈良から鎌倉時代にかけての遺物が採集されている五反田貝戸遺跡（市遺跡No42）が存在する。

本遺跡を含む七和地区では、昭和47年に七和2号窯（市遺跡No23）の発掘調査が行われている。これは奈良～平安時代に操業していたと考えられる須恵器、灰釉陶器等を焼成した窯跡で、近在の同時期の遺跡に供給したと見られる。その後、七和地区での本格的な発掘調査は行われておらず、今回の調査は30年振りの調査となった。

第3章 遺構と遺物

第1節 遺構

溝7条、建物4棟、井戸2基、井戸に伴う覆屋1棟、柱列4条、土坑9基等が検出された。その他性格不明の遺構も多数検出されている。以下に詳細を記す。

溝1 調査区北東に位置する南北に延びる溝である。北端はほぼ直角に東に屈曲する。攪乱等によって一部不明な部分もあるが、全長は29.4m、断面の形状はU字状で深さは0.3mを測る。

溝2 調査区の西から東にかけて位置する溝である。溝1の西を南北方向にほぼ平行に走り、17.5mではほぼ直角に西に屈曲、北に張り出した部分を形成しながら調査区西端にてわずかに南に折れて止まる。途中攪乱などに遮られるが、全長は46.8m、深さは0.3mを測る。断面の形状はU字状である。

溝3 調査区中央部の西端に位置する南北方向に延びるごく短い溝である。全長は1.5m、断面の形状はU字状で深さは0.2mを測る。溝2の西端のわずかに折れたものの延長線上に位置し、区画をあらわすものと考えられたため、溝として認識している。

溝4 調査区の南西隅に位置する南北方向に延びる溝である。全長5.2m、深さ0.1m、断面の形状はU字状である。溝3の延長線上に位置し、溝2、3との関連が考えられる。溝1～4は敷地の区画を意識したものと思われる。

溝5 調査区南端に位置する溝である。全長12.6m、深さ0.2mを測る。断面の形状はU字状である。

溝6 調査区の南西に位置する。全長9.4m、深さ0.2m、断面の形状はU字状である。

溝7 溝6の東に位置する全長2.6m、深さ0.2mの溝である。溝6の延長線状に位置しているため何らかの関係が考えられる。断面の形状はU字状である。

建物1 調査区南方に位置する柱穴13基からなる掘立柱建物跡である。

建物2 調査区南方に位置する柱穴12基からなる掘立柱建物跡である。建物1の南に位置する。

建物3 調査区南方に位置する柱穴8基からなる掘立柱建物跡である。建物2の南に位置する。調査区の南端に位置し、発掘区外となるため検出できなかったが、さらに南に建物跡は続く可能性もある。なお、建物1、2、3は主軸をほぼ同じくするため同時期に存在していた可能性が高い。

建物4 調査区北西に位置する柱穴8基からなる掘立柱建物跡である。建物1～3より柱穴の間隔がやや広い。

井戸1 調査区の南東、建物2の東に位置する。平面は一辺1mの隅丸正方形を呈している。深さは1.6mで砂利混じりの非常に締まりの良い地山に掘り込まれている。内部に施設はなく、素掘りのものである。最深部より墨書をもつ山茶碗(45)が出土した。

覆屋 柱穴6基からなる掘立柱建物である。井戸1及び、周辺の掘り込みを囲むように位置している。覆屋は建物1～3と主軸をほぼ同じくする。

井戸2 調査区西端中央に位置する。平面形は楕円形で、長辺2.3m、短辺1.5m、深さ0.5mを測る。井戸1同様、砂利混じりの地山に掘り込まれている。埋土中には直径0.1mの礫が多量に含まれており、その礫層の上面には鉢(74)が正立した状態で検出された。

柱列1 調査区の南方、建物1の南西に位置する柱列である。南北方向に4基、北端の柱穴から西に直角に折れてさらに柱穴1基が並ぶ。調査区の南西隅部及び南東隅部は遺構面を形成する土層に小礫を多く含むため、掘り込みを確認しにくかった。すでに滅失した遺構もあるようで調査区内の他の部分に比べてさほど密には検出されなかった。主軸が建物1とほぼ同じになることから西に広がる建物跡となる可能性もある。

柱列2 調査区のほぼ中央に位置する。東西方向に延びる柱列で柱穴4基からなる。建物1の北に位置し、軸も建物1とほぼ同様である。全長は8.1mで、建物1の東西幅とほぼ同じであるが、柱穴の間隔は建物1よりやや広い。

柱列3 調査区中央の西端に位置する東西方向に延びる柱列である。全長は8.4mで柱穴4基からなる。溝2とほぼ平行に走る。横列か。

柱列4 溝2の北に張り出した部分の内側に沿って位置する柱列である。全長10mで溝2と同様ほぼ直角に屈曲する。柱穴は他の柱列のものに比べて直径がやや小さい。溝の内側を巡る欄と考えられる。

土坑1 調査区の南東に位置する平面楕円形を呈する土坑である。長辺4.4m、短辺2.7m、深さ0.1mを測る。

土坑2 建物1と建物2の間に位置する長辺3.4m、短辺2.1m、深さ0.1mの土坑である。土坑底部の東端と西端に長さ1.4m、幅0.15m、深さ0.05mの溝が掘削されている。その内側に直径約0.1mの小土坑が多数存在し、さらに北西には長辺1.5m、短辺1m、深さ0.1mの土坑がある。

土坑3 調査区中央の北端に位置する長辺3.5m以上、短辺3m、深さ0.3mの土坑である。北端は調査区外に延びるため全体の形状は不明である。

土坑4 調査区北東に位置する一辺1mの平面隅丸正方形の土坑である。土坑5と切合い関係にあるが前後関係は不明である。

土坑5 調査区北東に位置する一辺1.1mの平面隅丸正方形の土坑である。土坑4と切合い関

係にあるが前後関係は不明である。

土坑6 調査区北東に位置する一辺0.8mの平面隅丸正方形の土坑である。

土坑7 調査区北東に位置する一辺1mの平面隅丸正方形の土坑である。

土坑8 調査区北東に位置する一辺1mの平面隅丸正方形の土坑である。

土坑4～8は互いに近接し、平面形や規模が類似しているが、いずれも性格は不明である。

土坑9 調査区中央の東端に位置する土坑である。平面形はほぼ正円形で、埋土には炭や焼土が多量に混じっていたが、底部や土坑周辺には被熱した箇所は見られなかった。

第2節 遺物

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、常滑窯製品、輸入磁器、土錫、瓦、鉄製品が暗褐色土層（遺物包含層）を中心に出土している。以下に特徴等を記す。法量等の詳細は遺物一覧表を参照されたい。

1. 土師器

軟質でおおむね赤褐色を呈するものを土師器として記述する。皿・壺・鍋・羽釜がある。

皿 1は体部が丸味を帯びて立ち上がり、口縁端部はわずかに内湾する。内面はヘラ磨きが施された後に放射線状の暗文が一段施される。外面の口縁部は回転ナデが、体部から底部にかけては指オサエによる調整が施される。2～17は手づくねで成形された後、内外面ともにナデによる調整が施されるものである。これらは形態や法量による分類が可能と思われるが、小破片であり出土個体数も少ないため、ここでは一括して報告する。

壺 18～20はいずれも口縁部のみ出土である。18は内面胴部に横ハケ、外面頸部及び内面頸部から口縁部にかけてと外面頸部は横ナデが施される。外面胴部は磨耗のため調整は不明である。19は頸部の内外面と外面口縁端部に横ナデが施される。外面口縁部と体部には斜めにハケ調整され、内面胴部には横ハケがみられる。20は外面胴部に斜めにハケ調整、口縁部に横ナデが施されている。内面は磨耗のため調整は不明である。

鍋 21はいわゆる清郷型鍋である。口縁部から体部にかけて「く」の字状となる。口縁端部は横ナデにより面取りされ、断面は菱形状となる。22、23はいわゆる伊勢型鍋である。22は口縁端部の折り返しがやや弱い。内面から外面頸部にかけて横ナデが施され、外面体部にはナデと指オサエが見られる。外面から内面口縁部にかけて煤が付着する。23は内外面横ナデが施される。外面に煤が付着する。

羽釜 24は体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は内傾する面を有し、わずかに内側に折り返されたようになる。鋳は水平にのび、端部は中心に向かって屈曲し、面を有する。内面は横方向のナデによる調整が施され、胴部には鋳の接着の際の指オサエが見られる。外面胴部には板状工具による横方向の調整が見られる。25は体部から口縁部にかけてやや内傾して直線的に立ち上がる。口縁端部は外傾する面を有し、わずかに外反する。口縁部には直径0.6mmの穿孔があるが、磨耗が激しいため焼成前のものか後のものかは不明である。鋳は水平にのび、端部は中心に向かって屈曲し、面を有する。調整は内面から外面鋳上面にかけてナデが施される。外面胴部には板状工具による横方向の調整が見られる。外面には鋳端部から胴部にかけてススが付着する。

2. 須恵器

杯蓋 26は頂部に擬宝珠鈕、内面口縁にはかえりを有する。27は口縁が下方に向かって折り返されるが、折り返しはごく弱い。外面頂部周辺にはヘラ削りが認められる。28は体部が陣笠状となり、口縁部は下方内側に折り返される。外面頂部周辺にはヘラ削りが見られる。

杯 29は蓋受を有する杯。口縁先端は蓋により若干の摩滅が認められる。30、31は無台杯。30は外面底部から腰部にかけてヘラ削りが施される。杯蓋26と同一の遺構、層位から出土しており、セット関係が想定される。31は外面底部のみがヘラ削りされる。

32～35は有台杯。32は底部が高台接地面より下方に突出する。高台は断面が撥型になり、角が強く張り出す。33は高台の断面が撥型になる。角の張り出しは強く、外端で接地する。外面底部にはヘラ記号が認められる。34は高台の断面が撥型になる。角の張り出しは弱く、外端で接地する。35は外面底部にヘラ削りの後に板目がわずかに見られる。高台は断面が撥型になるが、角の張り出しは弱く、外端で接地する。

椀 いずれも底部が残存しておらず、高台の有無は不明である。36、37は内外面ともに回転ナデが施されており、口縁部はわずかに外反する。38も内外面に回転ナデが施されるが、内面は丁寧なナデによって平滑に仕上げられる。口縁端部は内傾し、面が作り出される。

瓶 39は平瓶ないしはフラスコ型瓶の頸部と思われる。頸部から口縁部に向かって外反し、口縁端部は外傾した面を有する。内面口縁部から外面口縁端部にかけて降灰がみられる。

3. 灰釉陶器

椀 40～43はすべて有台の椀である。40は下端の内傾するいわゆる三日月高台を有するものである。内面底部には重ね焼きの際の高台の剥落痕がある。また内面底部は使用による磨耗が認められる。41は高台が断面逆台形を呈し、外面には灰釉が漬け掛けされている。内面体部には降灰が認められる。42の高台はやや背の高い断面逆台形を呈し、内面体部に降灰が認められる。43は内面全体に降灰が見られる。

広口瓶 底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。内面と外面体部には回転ナデ、外面底部にはヘラ削りが施されている。高台は巾広で外端で接地する。高台裏には窪んだ面をもつ。

4. 山茶碗

瓷器系中世陶器第Ⅱ類、いわゆる山茶碗は碗・小碗・小皿・鉢が出土している。ほとんどが東海地方南部系のものであるが、69のみ北部系の特徴を有するものである。

椀 45、46には外面底部に墨書が認められる。45は「佐久□」、46は「可者乃」と読める。いずれも人名または地名と思われる。

48～51は体部にやや丸味がみられ、口縁はゆるやかに外反する。内面底部中心にはごく弱

い指圧が施され、使用による磨耗が顕著である。高台裏には初殻痕が認められる。52は口縁部が若干肥厚し、丸味をもって仕上げられている。57は外面底部に高台の剥落痕が残る。

60は体部に丸味を残しながらも直線的に立ち上がるもので、内面底部には強い指圧が施される。高台裏には初殻痕が残る。

63は体部が直線的に立ち上がる。口縁の調整は弱く、高台は低くつぶれた形態となっている。高台裏には初殻痕が認められる。

67は体部が外に若干開きながら直線的に立ち上がる。高台は付けられず、糸切り痕がそのまま残されている。

69は東海地方北部系のもので均質な胎土が用いられ、薄手に仕上げられている。

また、45、62、67には内外面にススが付着している。

小椀 70～72は無台の小椀である。体部にはやや丸味があり、底部には糸切り痕が残されている。70には内面底部にごく弱い指圧が認められる。

小皿 73は体部から口縁にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は断面三角形を呈する。内面は体部にやや水平な面を有するが、底部中心にむかってゆるやかに内傾し、中心は窪む。外面底部はナデによる調整が施される。内面の2箇所に2cm×1cm程の粘土が付着していたと思われる痕跡があり、重ね焼きされていたものと考えられる。粘土付着痕以外の内面には降灰が見られる。通常の小皿の形態とは異なるため、托として製作された可能性も残る。

鉢 74は底部は水平で、体部にかけて屈曲し、体部は丸味を有しながら立ち上がる。口縁端部は断面四角形を呈し、1ヶ所に指オサエによる片口を有する。高台は付高台で断面逆三角形を呈する。調整は外面体部中程から内面にかけて回転ナデが施され、外面体部下半と外面底部はヘラ削り、高台周辺はナデが施される。75は底部は水平を保ち、体部にかけて屈曲し立ち上がる。高台は付高台で端部は丸味をもつ。調整は内面、外面体部に回転ナデが施され、外面底部は糸切痕、高台周辺にはナデが施される。内面には使用痕が認められ、外面底部から高台裏、腰部にかけてススが付着している。76はやや内傾する底部を持ち、体部にかけて屈曲し外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁端部はやや肥厚する。高台は付高台で、断面逆台形を呈する。調整は内外面ともに回転によるナデが施されている。内面底部には使用痕が認められる。

5. 常滑窯製品

羽蓋 77は体部はほぼ垂直に立ち上がり、鈎は水平にのびている。口縁部は鈎からやや内湾ぎみに立ち上がり、端部はほぼ垂直となる。鈎外面から口縁端部にかけて降灰が見られる。赤褐色で堅致な焼成であることから常滑窯で焼かれたものと考え、同時期に猿投窯でも

ほぼ同様の製品が焼成されており、産地については断定できない。

鉢 78は口縁部は外傾し直線的に立ち上がる。口縁端部は面を有し、1カ所に片口が付けられる。調整は内外面ともに回転ナデが施される。

甕 79は体部上方から頸部にかけての部位と思われる。やや反りながら内傾し立ち上がる。内外面ともにナデが施され、外面体部と内面頸部上方に降灰が認められる。外面の頸部上方に降灰が認められない状況から、口縁部は頸部には接しない程度に折り返された形を呈していたと考えられる。

6. 輸入磁器

80は白磁の碗である。底部から体部にかけて緩やかに立ち上がり、丸味を帯びた高台を有する。内面には上方のみにわずかに釉が認められる。内面には使用痕がある。

青磁は同安窰系と思われる碗が出土している。内面の巻草の間に櫛状の器具による篋点文を加え、外面には5本単位の直線文が施される。小破片のため図化していない。

7. 土錐

81～83の3点が出土している。小型で管状の錐である。いずれも指ナデによる調整が見られる。端部は磨耗している。

8. 瓦

丸瓦 84は凹面に布目痕が認められるが、凸面は磨耗のため調整痕は不明である。85は磨耗が激しく調整は不明である。

平瓦 いずれも凹面に布目痕が残る。86～88は凸面に格子状タタキが、89はヘラ状工具による調整、90・91には指ナデが施される。91は端部が焼成前に半円形にえぐられている。

9. 鉄製品

93の1点のみが出土した。下端が欠損しており、形状に不明な点が多いが鉄鐵と考えられる。

第4章 まとめ

本章では特徴的な遺構や遺物についてその性格等を考えるとともに、出土遺物から遺跡の年代等を推測し、調査のまとめとしたい。

井戸について

井戸1は調査区の南東部で検出された。平面形が一辺1mの隅丸方形を呈する素掘りのもので、深さは地表面から1.4mを測る。また、小屋掛け程度と思われる覆屋の柱穴が周囲から検出されている。雨水を防ぐためのものと考えられる。覆屋の周囲は若干低くされており、雨水が流入しにくい状況からも上水用の井戸であったことが窺える。

最深部からは外底に墨書のある完器の山茶碗が出土したが、意図的に配置されたものかは判然としない。埋土の堆積状況は他の土坑・溝等、遺構のほとんどが暗褐色粘質土層、すなわち遺物包含層のみ堆積しているのに対し、井戸1では複数の土層が徐々に堆積したことが確認できる。井戸1は遺跡の廃絶後、徐々に埋没していったものと考えられる。

井戸2は調査区の東端で検出された。上部構造はなく、井戸1よりも小規模である等、上水用とは考え難い。しかし、他の土坑よりも深く、地山の砂利を多量に含んだ土層まで掘り抜いているため、豊富に湧水があること等から、農業用やその他の用途をもつ井戸として考えておきたい。

貝井川をはさんだ本遺跡の対岸には、ほぼ同時期に存在したと考えられる篠原遺跡がある。篠原遺跡においても集水遺構が検出され、井戸ないしは水汲み場としての性格が想定されている。本遺跡で検出された2種類の井戸は今回の調査では明らかにできなかったが、用途に応じて使い分けされていた可能性が考えられる。

出土遺物と遺跡の年代

本遺跡から出土した遺物は、主に東海地方で生産された日常雑器と考えられるいわゆる山茶碗が量的に最も多く出土している。粗雑で灰白色を呈する胎土をもつ東海地方南部系のものが殆どで、藤沢良祐の山茶碗編年の第4～8型式に概ね該当するが、その中でも12世紀後葉に比定される第5型式のものが最も多く確認できる。

また、輸入磁器の白磁碗や、土師質の煮炊具であるいわゆる伊勢型鍋等も同時期の遺物として考えられよう。

以上から、本遺跡は概ね12世紀中頃から14世紀頃にかけて集落が営まれていたようで、その最盛期は12世紀後葉から13世紀前葉にかけてであったと考えられる。

また、須恵器、灰釉陶器の出土等から、中世の集落が形成される以前においても、何らかの遺跡が存在した可能性が指摘できる。古墳時代以降連続と生活が営まれてきた可能性も示唆することができ、盛期を過ぎた後も何らかの土地利用がされていたと考えられよう。

瓦の出土と地元伝承

調査地及びその周辺は地元の伝承によると、「宮（ミヤ）」と呼ばれる小規模な社寺があったとされており、「ニノミヤ」「フタツミヤ」等の通称地名が残る。

発掘調査では社寺の存在を裏付ける遺構は検出されなかったため、この伝承を積極的に支持することは現時点では留保するが、瓦の出土がみられたことを指摘しておきたい。瓦は完形のものではなくすべて細片であるが、ローリングを受けた形跡が認められないことから、ごく近在で使用されていたものと思われる。伝承の社寺に由来する可能性も考えられよう。

参考文献

- 桑名市教育委員会 1959 『桑名市史 本編』
- 桑名市教育委員会 1960 『桑名市史 補編』
- 三重県文化財連盟 1973 『七和2号竈址発掘調査報告』
- 植崎彰一 1977 「中世の社会と陶器生産」『日本陶磁全集3 日本中世』中央公論社
- 藤澤良祐 1982 「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館
- 桑名市教育委員会 1985 『桑名市の指定文化財』
- 桑名市教育委員会 1987 『桑名市史 続編』
- 青木修 1993 「片口鉢の研究—中世知多古窯址群を中心として—」『研究紀要 第1輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
- 青木修 1994 「続片口鉢の研究—中世知多古窯址群を中心として—」『研究紀要 第2輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
- 中野晴久 1994 「生産地における福年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおいて」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
- 桑名市教育委員会 1995 『桑名市遺跡分布地図』
- 永井宏幸 1996 「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」第4回 東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』
- 伊藤裕偉 1996 「伊勢の中世煮炊用土器から東海を見る」第4回 東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』
- 尾野善裕 2000 「猿投窯出土須恵器の主要器種分類」『第1回東海土器研究会資料 須恵器生産の出現から消滅—猿投窯・園西窯編年の再構築—』
- 桑名市教育委員会 2002 『猿投遺跡発掘調査報告書 —猿投農住土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—』

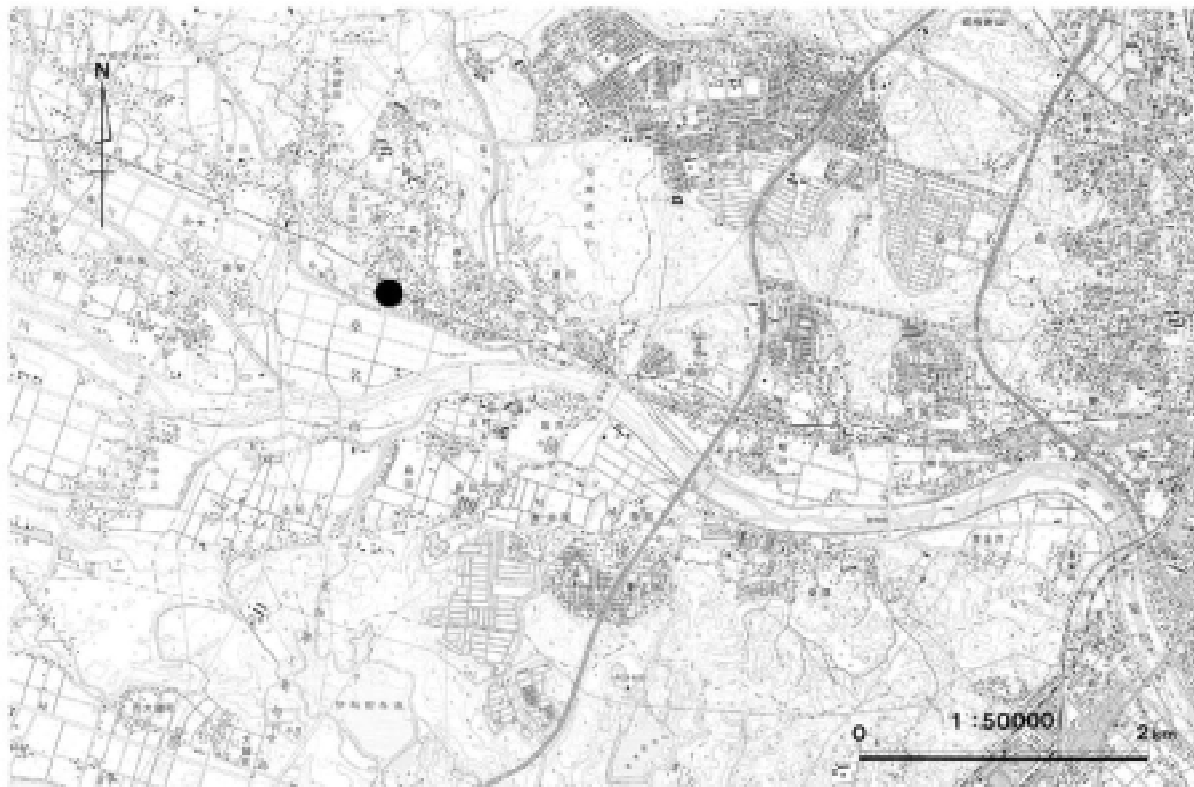
報告書 番号	グリップ名	層位/遺構	器 種	法量(cm)			備 考	推定年代
				口 径	高台径	器 高		
1	C-あ	包含層	土師器 皿	(21.30)	—	—	略文、ヘラ磨き	
2	T4	包含層	土師器 皿	(15.50)	(6.80)	—	口縁部磨耗	
3	T4	包含層	土師器 皿	(12.90)	(7.45)	—	口縁部磨耗	
4	D-い	表土層	土師器 皿	(10.36)	(6.10)	1.60		
5	T4	包含層	土師器 皿	(9.90)	(8.25)	—	口縁部磨耗	
6	T4	包含層	土師器 皿	(9.10)	(7.45)	1.32	口縁部磨耗	
7	D-い	表土層	土師器 皿	(8.05)	—	—		
8	C-あ	包含層	土師器 皿	(8.30)	—	—	口縁部磨耗	
9	D-い	柱穴13	土師器 皿	(7.88)	(4.10)	—		
10	D-い	柱穴13	土師器 皿	(7.36)	(2.60)	—		
11	T4	包含層	土師器 皿	—	—	—	口縁部磨耗	
12	T4	包含層	土師器 皿	—	—	—	口縁部磨耗	
13	T4	包含層	土師器 皿	—	—	—	口縁部磨耗	
14	E-え	溝2	土師器 皿	—	—	—	全体に磨耗	
15	T4	包含層	土師器 皿	—	—	—	口縁部磨耗	
16	D-い	表土層	土師器 皿	—	—	—		
17	E-い	井戸2	土師器 皿	—	—	—	口縁部磨耗	
18	B-え	包含層	土師器 甕	(15.05)	—	—	外面胴部から内面口縁部にかけて磨耗	
19	B-え	包含層	土師器 甕	(13.80)	—	—	外面から内面口縁部にかけて煤付着	
20	T5	包含層	土師器 甕	—	—	—	内面磨耗	
21	C-う	溝2	土師器 鍋	—	—	—	磨耗激しい	Vb期
22	F-う	土坑13	土師器 鍋	—	—	—	外面胴部ナデ、外面から内面口縁部にかけて煤付着 内面口縁部にかけて煤付着	
23	D-え～お	包含層	土師器 鍋	—	—	—	外面煤付着	第2段階
24	C-う	溝2	土師器 羽釜	—	—	—	外面鍋下煤付着	13C～14C
25	C-う	溝2	土師器 羽釜	—	—	—	直径0.6cmの穿孔、外面鍋下煤付着	13C～14C
26	E-い	土坑1	須恵器 杯蓋	10.05	—	2.85		IV期中位階
27	C-い	柱穴10	須恵器 杯蓋	(14.20)	—	—	頂部ヘラ削り	IV期中～新段階
28	B-え	包含層	須恵器 杯蓋	(14.10)	—	—	外面頂部ヘラ削り	V期中位階
29	C-あ	柱穴69	須恵器 杯	(9.60)	—	—	口縁部磨耗	IV期古段階
30	E-い	土坑1	須恵器 杯	(9.40)	(4.40)	3.30	外面底部断続回転ヘラ削り、外面底部と口縁部磨耗、口縁部は一部欠損後の磨耗もみられる	IV期中～新段階
31	F-あ	表土層	須恵器 杯	—	(7.90)	—	外面底部ヘラ削り、磨耗激しい	V期新段階
32	C-い	包含層	須恵器 杯	—	(14.25)	—	外面底部ヘラ削り	IV期新段階
33	B-お	表土層	須恵器 杯	—	(9.70)	—	糸切痕、外面底部ヘラ記号、内面磨耗	IV期中～新段階
34	B-え	包含層	須恵器 杯	—	(10.75)	—		V期新段階～V期中位階
35	B-え	包含層	須恵器 杯	—	(9.80)	—	外面底部ヘラ削り後ナデ、板日痕	
36	B-え	包含層	須恵器 碗	—	—	—		
37	E-い	土坑1	須恵器 碗	—	—	—		
38	B-え	包含層	須恵器 碗	—	—	—	内面体部非常に丁寧にナデ	
39	D-い	柱穴13	須恵器 蓋	(8.40)	—	—	外面口縁部から内面口縁部にかけて降灰	IV期古～中位階
40	C-お～か	包含層	灰輪陶器 碗	—	(7.50)	—	外面底部ヘラ削り、内面見込みに直接重ね焼きした痕跡、内面体部施釉、使用痕	
41	D-う	柱穴70	灰輪陶器 碗	—	(7.15)	—	外面灰輪つけ掛け	
42	E-い	井戸2	灰輪陶器 碗	—	(5.80)	—	内面胴壁に灰輪ハケ塗り、内面底部に直接重ね焼きした痕跡あり	
43	F-あ	表土層	灰輪陶器 碗	—	(8.40)	—	外面底部ヘラ削り、内面降灰	
44	C-い	包含層	灰輪陶器 広口瓶	—	(9.45)	—	外面底部回転ヘラ削り、外面胴部・高台と内面底部に降灰	
45	C-い	井戸1	山茶碗 碗	13.50	5.55	5.25	墨書「甚久口」、糸切痕、初級痕、内外面口縁部降灰、内面底部蛇ノ目状に使用痕、内面底部から胴部にかけて煤付着、外面口縁部と胴部に煤付着	第6型式
46	E-え	溝2	山茶碗 碗	—	(5.10)	—	墨書「可者乃」、糸切痕、指圧痕、初級痕	第6型式
47	E-お	包含層	山茶碗 碗	—	—	—	内面と外面口縁部に使用痕	第4型式
48	D-え	包含層	山茶碗 碗	(13.80)	(6.70)	4.38	糸切痕、初級痕、使用痕	第5型式
49	D-え～お	包含層	山茶碗 碗	(14.70)	(6.50)	5.50	初級痕、指圧痕、内面底部使用痕	第5型式
50	D-え～お	包含層	山茶碗 碗	14.25	7.20	5.30	左回転糸切痕、折圧痕、初級痕、口縁部に降灰、内面底部と畳付に使用痕	第5型式
51	T14	包含層	山茶碗 碗	(15.20)	6.30	4.85	糸切痕、指圧痕、初級痕、内面口縁部から胴部にかけて降灰	第5型式
52	D-え	包含層	山茶碗 碗	(13.50)	—	—	内面胴部と内外面口縁部に使用痕、	第5型式
53	D～F-お	表土層	山茶碗 碗	(15.30)	—	—		第5型式
54	E-お	包含層	山茶碗 碗	(14.10)	—	—	内面と外面口縁部に使用痕	第5型式

表1 遺物観察表

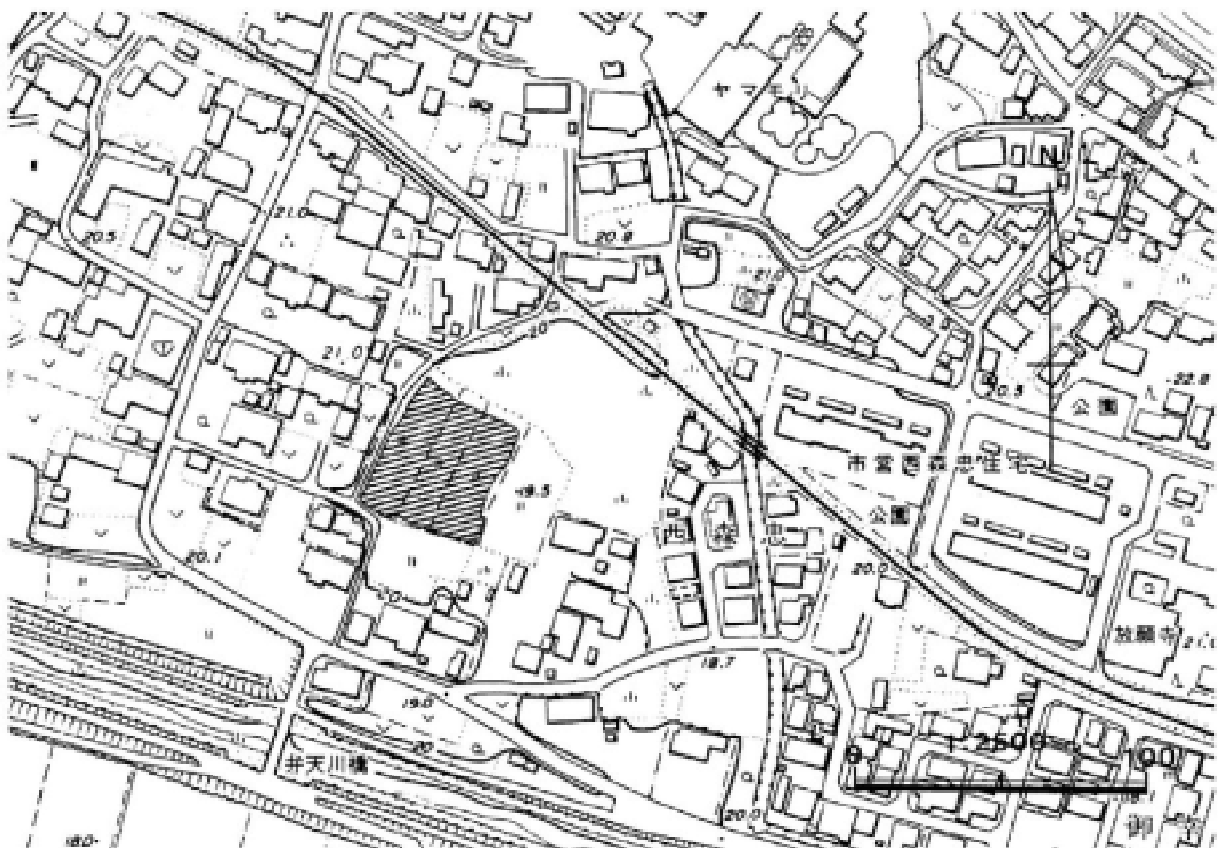
報告書 番号	グリッド名	階位/遺構	器 種	法量(cm)			備 考	推定年代
				口 径	高台径	器 高		
55	E-え	溝2	山茶碗 椀	—	(7.70)	—	糸切痕、板目痕、指圧痕、刷殺痕、内面に使用痕	第5型式
56	E-お	包含層	山茶碗 椀	—	6.50	—	糸切痕、指圧痕、刷殺痕、内面底部使用痕、畳付磨耗	第5型式
57	D-F-お	表土層	山茶碗 椀	—	(6.80)	—	糸切痕、指圧痕、付高台のあった復跡、刷殺痕、使用痕	第5型式
58	C-い	井戸1	山茶碗 椀	—	—	—	糸切痕、内面底部使用痕、畳付磨耗	第5型式
59	E-お	包含層	山茶碗 椀	—	(6.50)	—	糸切痕、内面底部指圧痕、刷殺痕	第5型式
60	C-あ	溝5	山茶碗 椀	(14.15)	(5.67)	5.77	糸切痕、指圧痕(2箇所)、刷殺痕、内外面口縁端部に降灰、内面全体に使用痕	第6型式
61	B-あ	溝5	山茶碗 椀	—	(6.35)	—	糸切痕、回転に伴う(?)指圧痕、刷殺痕、内面底部使用痕	第6型式
62	T4	包含層	山茶碗 椀	—	(5.90)	—	糸切痕、指圧痕、内面底部使用痕、外面胴部に焼付着	第6型式
63	D-い	柱穴13	山茶碗 椀	(14.15)	(6.65)	5.70	糸切痕、板目痕、指圧痕、刷殺痕、外面底部高台接合箇所を蛇の目状にヘラ削り、内外面口縁部に降灰	第7型式
64	E-え	溝2	山茶碗 椀	—	(5.20)	—	糸切痕、板目痕、指圧痕2ヶ所、刷殺痕	第7型式
65	C-い	包含層	山茶碗 椀	—	(6.40)	—	糸切痕	第7型式
66	E-え	溝2	山茶碗 椀	—	(4.75)	—	糸切痕、指圧痕、刷殺痕、使用痕	第7型式
67	B-え	包含層	山茶碗 椀	(13.50)	(5.50)	4.20	糸切痕、板目痕、内面底部使用痕、外面口縁部から内面底部にかけて焼付着	第8型式
68	E-え	溝2	山茶碗 椀	—	(5.30)	—	糸切痕、板目痕、指圧痕	第8型式
69	D-い	柱穴13	山茶碗 椀	—	—	—		
70	E-お	包含層	山茶碗 小椀	(8.50)	(4.80)	1.70	糸切痕、指圧痕、内面底部使用痕	第5型式
71	C-え	包含層	山茶碗 小椀	—	(3.40)	—	糸切痕、底部磨耗、内面降灰	第5型式
72	F-お	土坑11	山茶碗 小椀	—	(3.75)	—	糸切痕	第5型式
73	E-お	包含層	山茶碗 小皿	(7.00)	(4.00)	1.70	托カ、外面底部糸切痕のみナデ、内面降灰	
74	E-い	井戸2	山茶碗 片口鉢	29.70	14.20	11.70	片口、付け高台、口縁部降灰、内面使用痕、外面口縁部から高台畳付にかけてやや磨耗	
75	T10	包含層	山茶碗 片口鉢	—	(12.12)	—	糸切痕、内面使用痕、外面底部から胴部にかけて焼付着	
76	D-え	溝2	山茶碗 片口鉢	(25.80)	(11.60)	13.40	付け高台、内面から外面口縁端部にかけて使用痕、外面胴部から高台畳付にかけて磨耗	
77	F-う	土坑12	陶器 羽釜	—	—	—	外面鍋上面から口縁端部にかけて降灰	
78	C-う	包含層	陶器 片口鉢	—	—	—	片口	5型式
79	C-う	柱穴68	陶器 甕	—	—	—	外面体部と内面胴部に降灰	6-8型式期
80	T5	包含層	磁器 碗	—	(6.60)	—		IV期
81	B-え	包含層	土鍋	長(4.50)、胴径1.30、孔径0.43				
82	C-え	包含層	土鍋	長(3.45)、胴径1.30、孔径0.30				
83	C-う	包含層	土鍋	長(3.45)、胴径1.40、孔径0.30				
84	E-い	井戸2	瓦 丸瓦		厚さ2.2		凹面布目	
85	T4	包含層	瓦 丸瓦		厚さ3.0		磨耗のため調整不明	
86	C-う	溝1	瓦 平瓦		厚さ2.3		凹面布目、凸面格子状タタキ	
87	C-う	溝1	瓦 平瓦		厚さ2.1		凹面布目、凸面格子状タタキ	
88	C-う	溝2	瓦 平瓦		厚さ1.9		凹面布目、凸面格子状タタキ	
89	F-あ	表土層	瓦 平瓦		厚さ2.8		凹面布目、凸面ヘラ状工具による調整+	
90	C-う	柱穴68	瓦 平瓦		厚さ2.0		凹面布目、凸面指ナデ	
91	E-い	井戸2	瓦 平瓦		厚さ2.4		凹面布目、凸面縦方向と横方向にナデ、端部に焼成前に半円形のくぼみがつけられる	
92	T4	包含層	瓦 平瓦		厚さ2.5		凹面布目、凸面磨耗	
93	D-い	土坑10	鉄製品 鐵	長さ(2.60)、幅(1.3)、厚さ0.5				

復元値については()で、残存値については()で示した。

表2 遺物観察表



調査地位置図

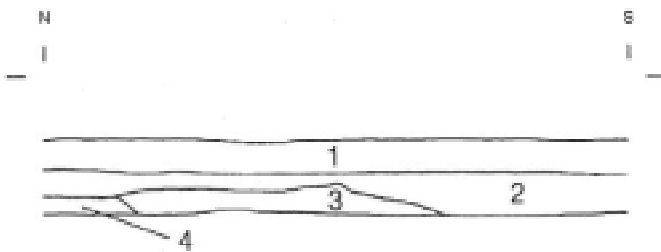


調査地点位置図

図版 1



試掘トレンチ位置図



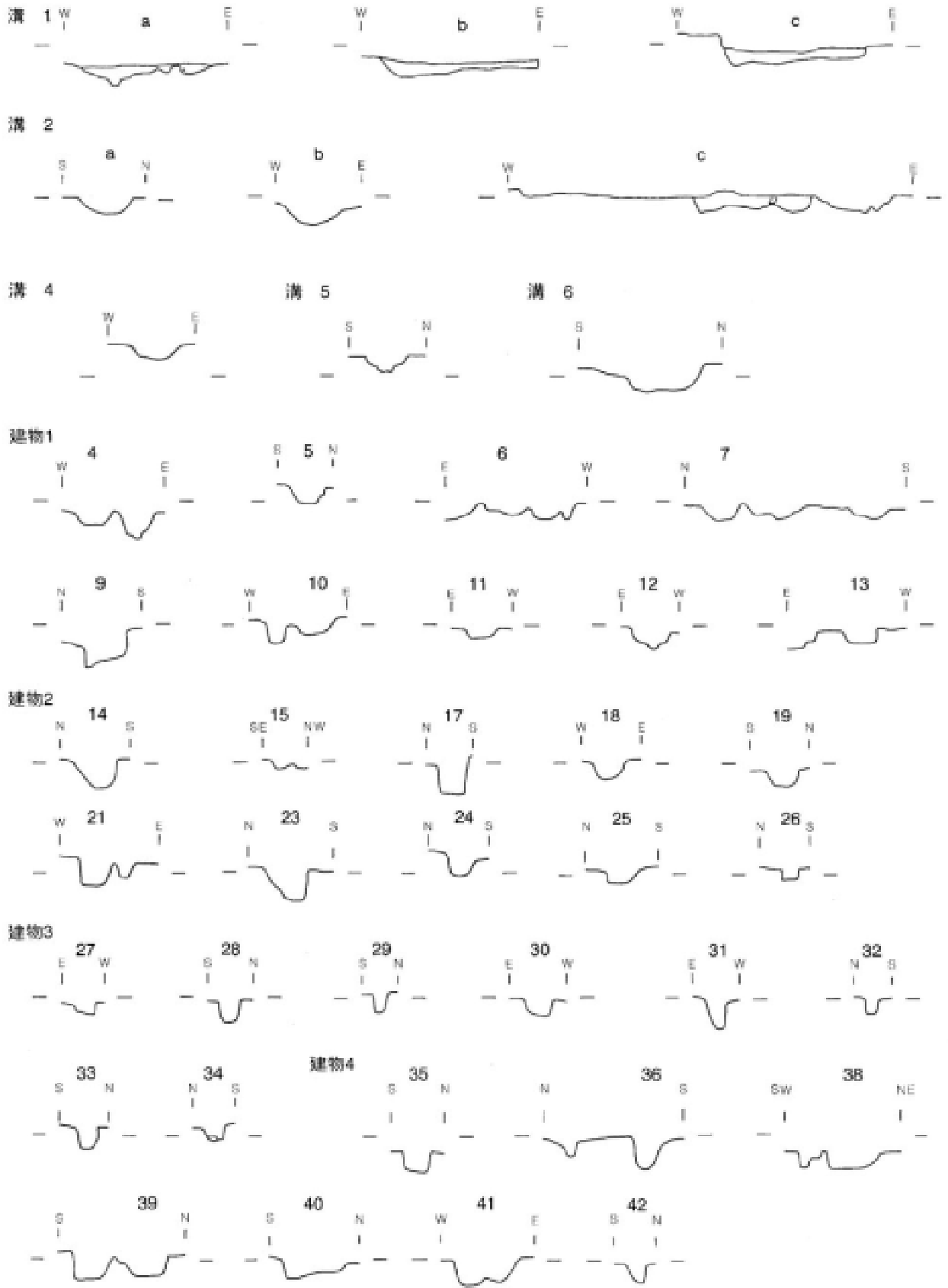
- 1 黒褐色土層 (耕作土)
- 2 暗褐色土層 レキ・焼土粒・炭多量
- 3 褐色土層 レキ少量
- 4 黄褐色土層 レキ多量



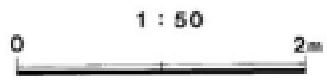
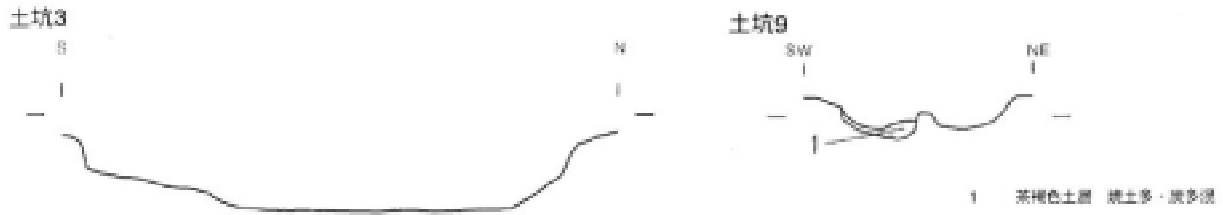
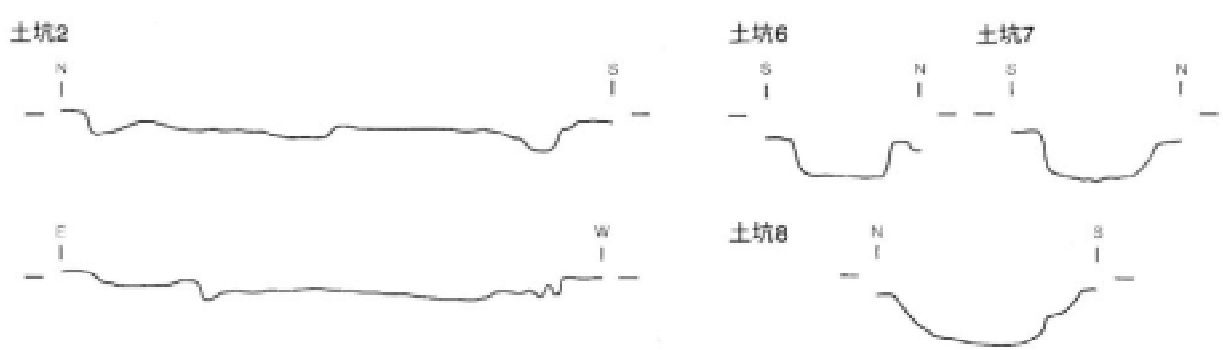
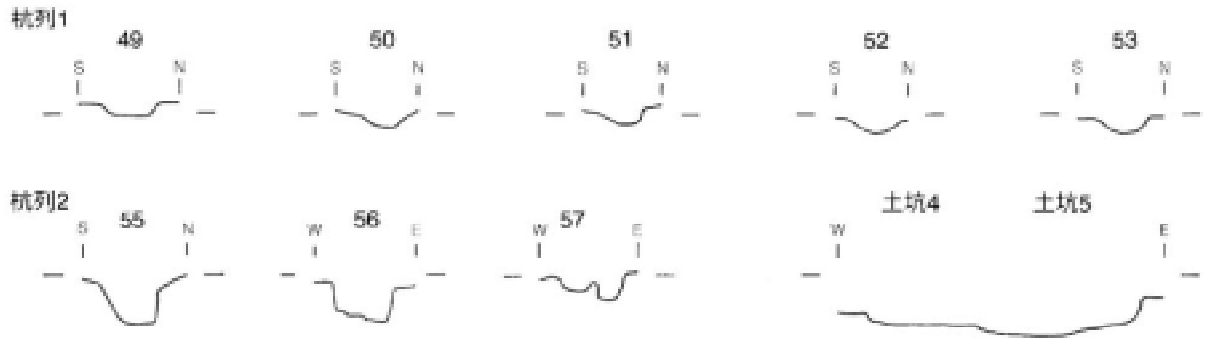
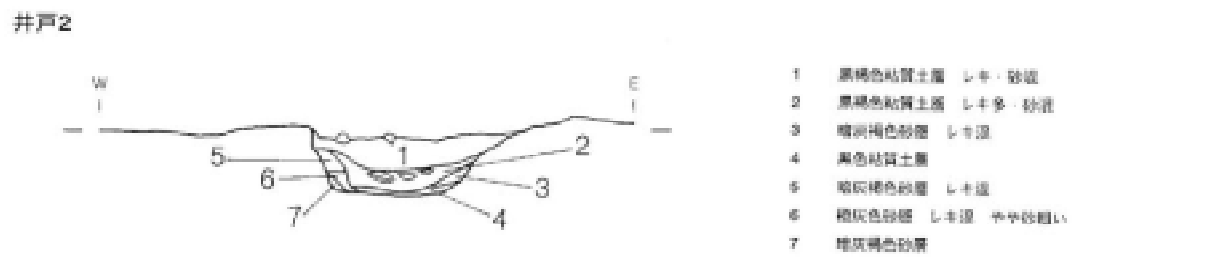
調査区土層断面図 (レベルは 19.000m)

図版2

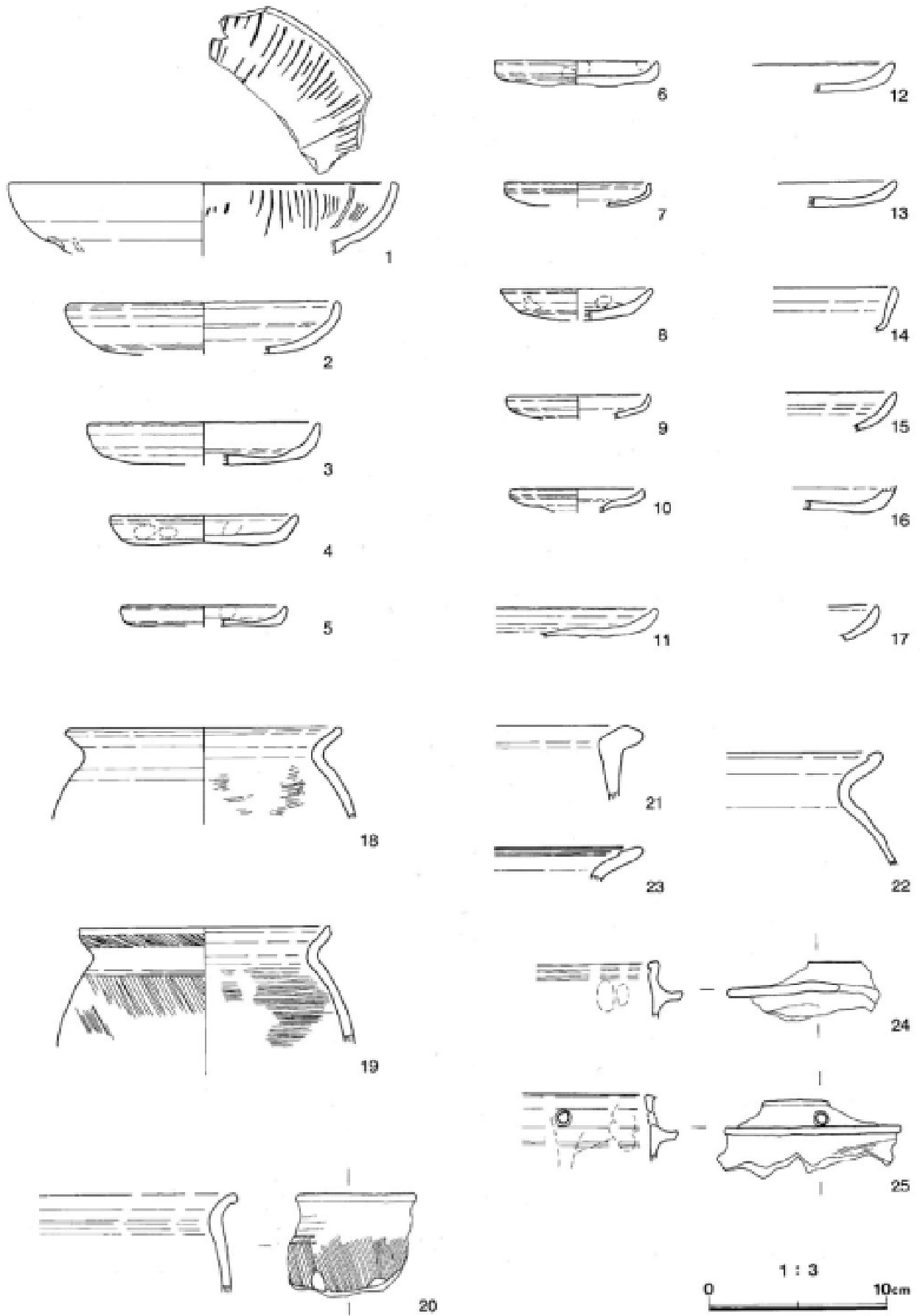




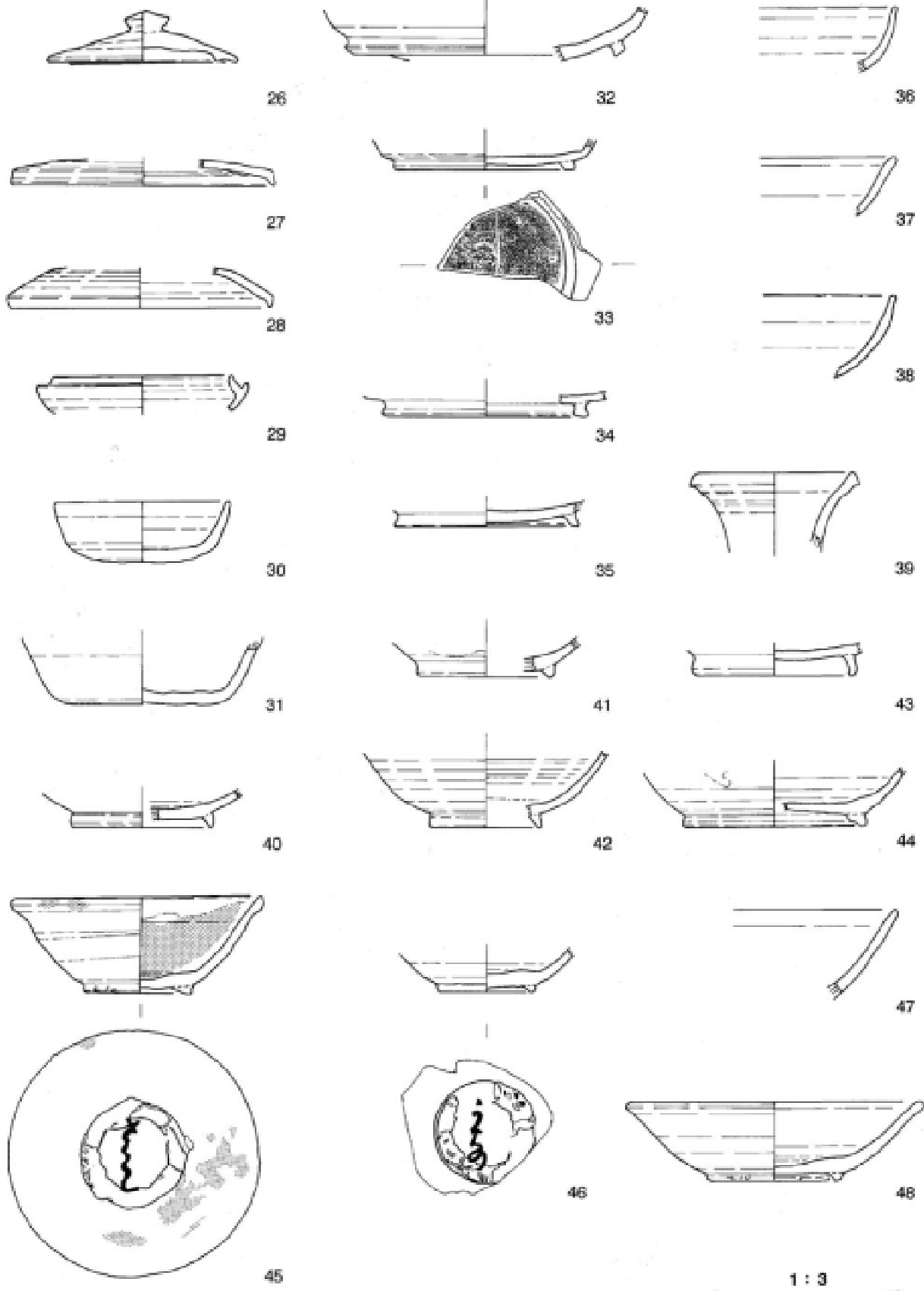
図版4 遺構断面図 (レベルは 19.000m)



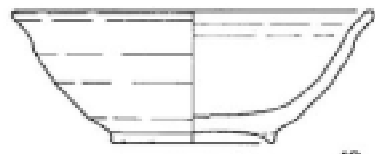
図版5 遺構断面図 (レベルは 19.000m)



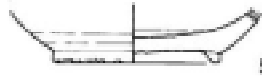
图版6 遗物实测图



图版7 遗物实测图



49



56



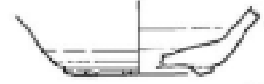
63



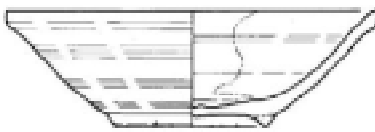
50



57



64



51



58



65



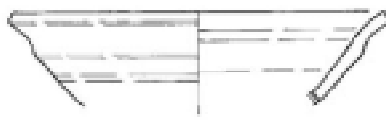
52



59



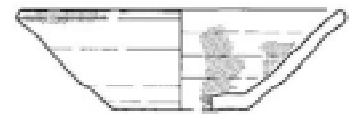
66



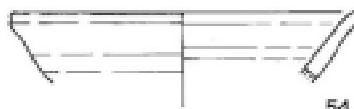
53



60



67



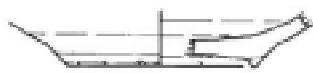
54



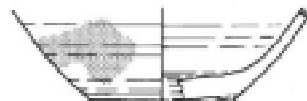
61



68



55



62



69



70



71



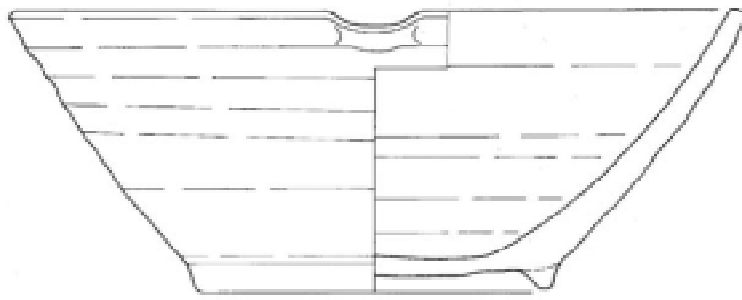
72



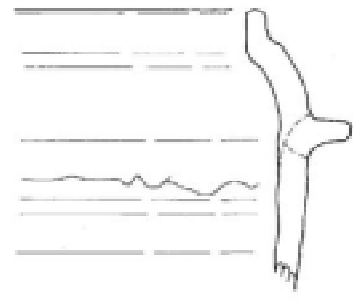
73



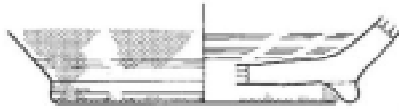
图版8 遗物实测图



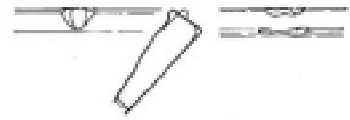
74



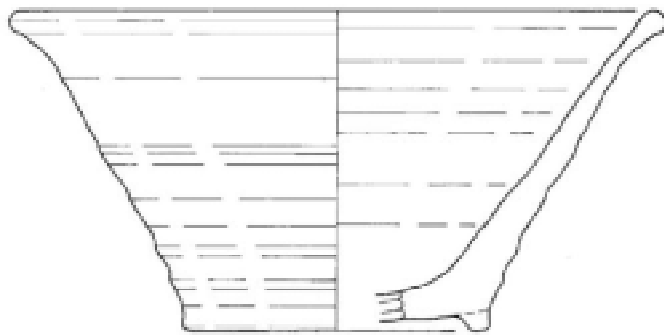
77



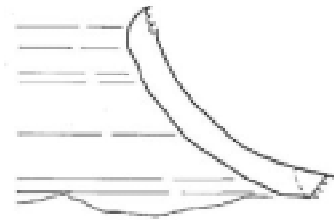
75



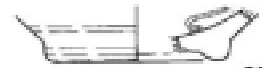
78



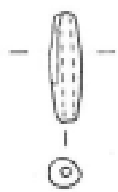
76



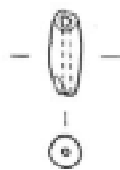
79



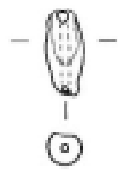
80



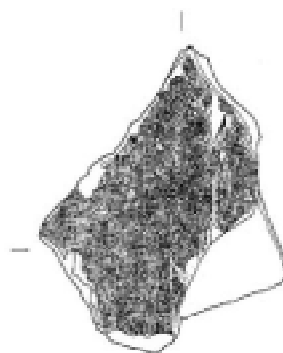
81



82



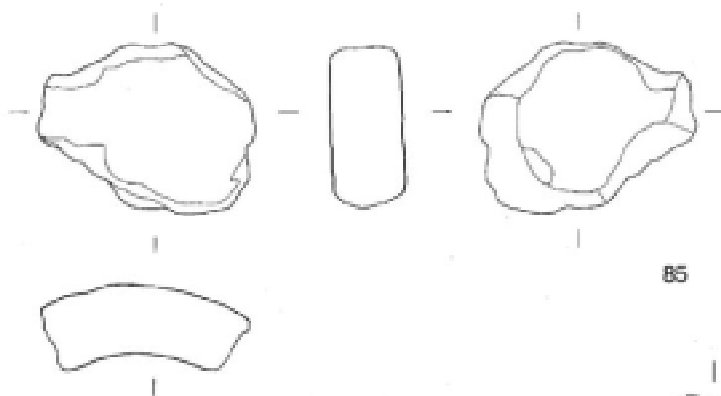
83



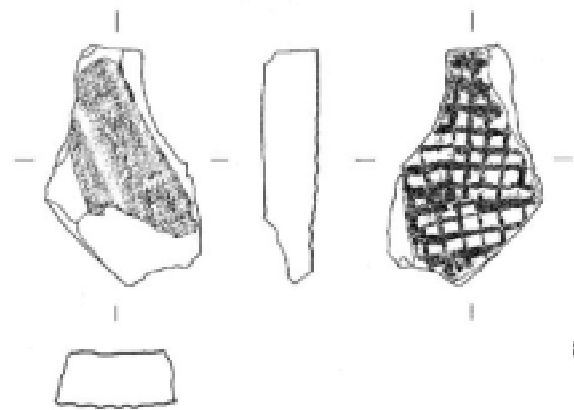
84



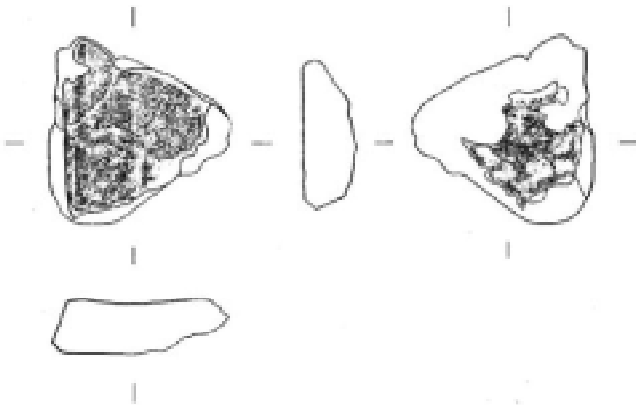
图版9 遗物实测图



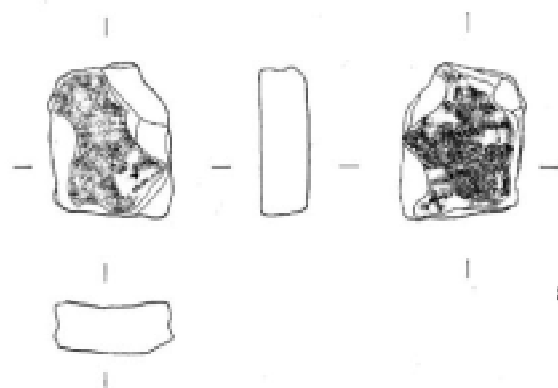
85



86



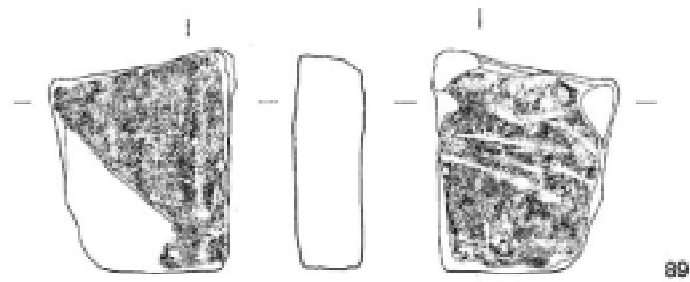
87



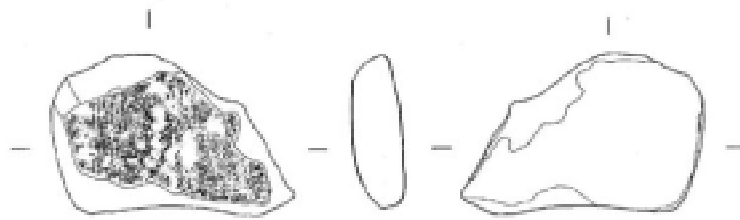
88



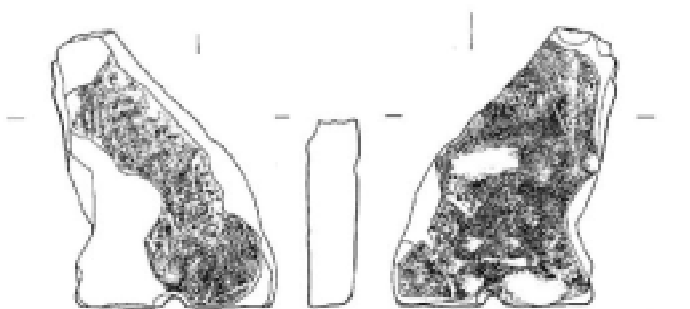
图版10 遗物实测图



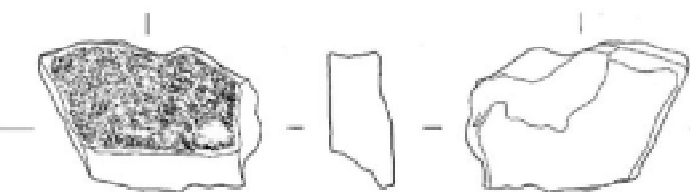
88



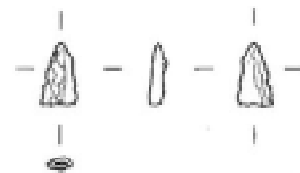
89



90



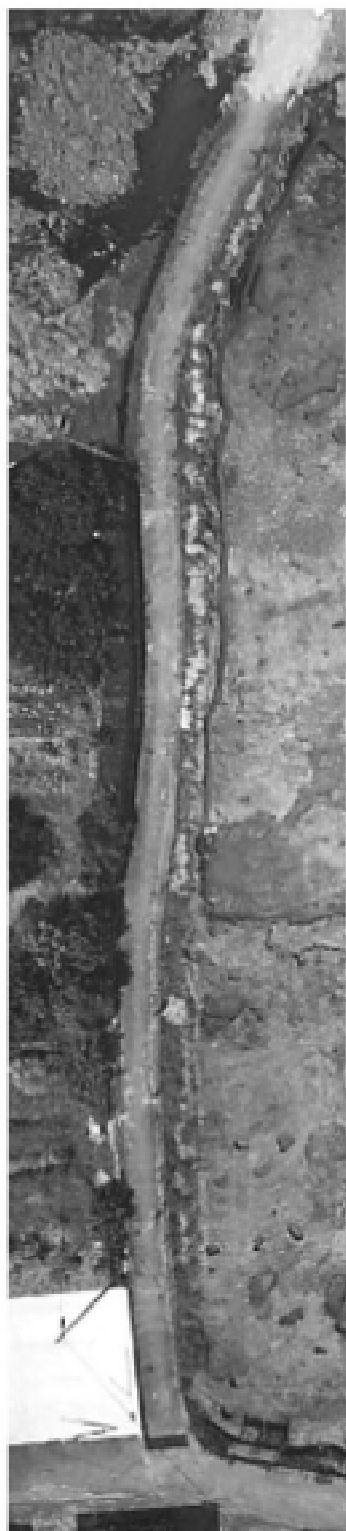
91



92



图版11 遗物实测图



調査区全景

カラー写真図版1



調査区近景（北東から）

試掘トレンチ位置図



試掘 作業風景



試掘 トレンチ4 全景



試掘 作業風景（測量）



試掘 トレンチ4 西向き壁

写真図版1



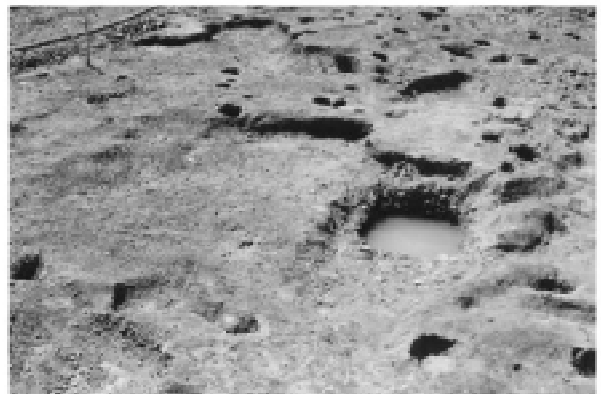
溝1・溝2 完掘状況（南東から）



溝5 完掘状況（南から）



溝1 断面（南から）



井戸1と覆屋 完掘状況（東から）



溝2 完掘状況（北東から）



井戸1 断面（東から）

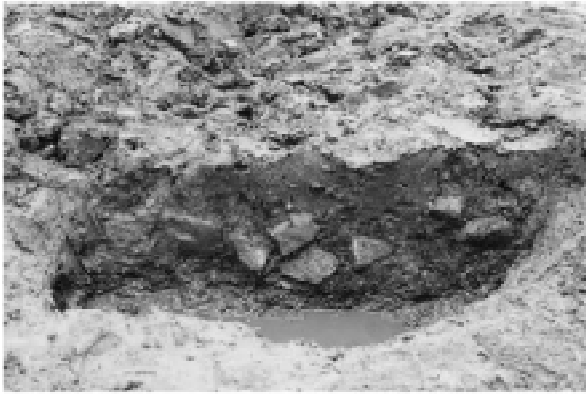


溝2 断面（南から）



井戸2 完掘状況（南東から）

写真図版2



井戸2 断面（北から）



作業風景



土坑4・土坑5・土坑6・土坑7・土坑8（東か



作業風景



土坑9 断面（南から）



作業風景



遺物（74）出土状況

写真図版3



現地説明会風景



出土遺物 (1)



出土遺物 (46)



出土遺物 (左上から2・8・11・6・5)



出土遺物 (51)



出土遺物 (45)



出土遺物 (73)



出土遺物 (45)



出土遺物 (74)

写真図版4

報 告 書 抄 録

ふりがな	はさまいせきはくつちようさほうこくしょ							
書 名	ハサマ遺跡発掘調査報告書							
編著者名	水谷芳春、斉藤理、平野亜紀							
編集機関	桑名市教育委員会							
所 在 地	511-8016 三重県桑名市中央町二丁目37番地 TEL 0594-24-1361							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 遺跡番号						
はさまいせき ハサマ遺跡	<small>くわんしよおほあざむらたけほろ つづみの1-おほあざむらたけほろ あざはさまms-1</small> 桑名市大字森 忠字正津376- 1・大字芳ヶ崎 字ハサマ895-1	No.136		35° 03′ 50″	136° 37′ 12″	20020703 ～20030331	1800m ²	住宅造成
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
ハサマ遺跡	集落跡	中世		建物跡 井戸 土坑 溝		山茶碗 土師器 瓦 須恵器 灰釉陶器		

本書の仕様

- ・判型 —— A4版
- ・印刷 —— オフセット印刷
- ・ページ数 48頁
- ・製版 —— DTPソフトにて処理
ポジ・ネガはドラムスキャナーを使用
スクリーン200線 (400dpi)
- ・製本 —— 左無線綴
- ・用紙 —— 表紙 みやぎぬ (さくら) 170kg
見返し 上質紙70.5kg
本文・図判・その他 マットコート紙70.5kg

三重県桑名市

ハサマ遺跡発掘調査報告書

2003年3月31日

編集・発行 桑名市教育委員会

印刷 株式会社山榮堂